

# 佐倉と江戸

## —近世の瓦質・土師質土器からみた地域性—

藤 尾 慎一郎

- 
- 1. はじめに
  - 2. 焙烙研究の現状
  - 3. 焙烙の諸属性
  - 4. 佐倉城出土焙烙の特徴
  - 5. おわりに
- 

### 論文要旨

考古学からみた江戸は市中を中心に進んだ発掘調査によって全貌が徐々に明らかにされつつある。特に焼物をつかって江戸市民の暮らしの復原や武家と町民の比較研究も盛んである。江戸時代の焼物には広域にわたって流通する陶磁器と各地で生産された素焼・瓦質の土器があるが、何を解きあかそうとするかによって資料として選ぶ焼物の種類は変わってくる。今回は江戸時代最大の消費都市である江戸とその周辺に位置する譜代大名の城下町の違いを日常生活のレベルからおさえるために、ゴマやマメを炒る土器である焙烙を用いて迫ってみたものである。焙烙は底部がきわめて薄くつくられているため、長距離の運搬には向かず、広域流通には不適な土器と考えられるところから、各地でつくられその商圈は非常に狭かったといわれている。したがって焙烙にみられる地域色を追求すれば、その商圈の範囲をおさえることができるし、各地の生活レベルや畠炉裏や竈といった火力施設にあった焙烙がつくられていたと予想されるため、当時の各地の生活の実態を探るうえでも有効な遺物であるといえよう。

分析の結果、江戸市中に比べて佐倉では畠炉裏から竈への転換がかなり遅れたことや、江戸とその周辺に中世からつながる工人集団と17世紀に関西から招聘されたとされる関西系工人が存在し、両者が消費のニーズにあわせてしのぎを削っていた状況があきらかとなつた。しかし絶対数が多い在地系工人主体の生産がここ佐倉では大勢を占めていたのである。また彼らと歴史上の下総土器作り集団との関連も注目される。江戸時代の煮沸具にみられる地域差が当時の生活状態を反映していたことは、筆者の専門である縄文・弥生時代の生活実態にもつながるものとして大いに期待できる分野である。